

進学情報センター相談室から

ー進学選択に向けてー

進学情報センター 斎藤文修

すでに平成28年度の進学振分け第1段階の進学内定者も発表され、この進学情報センター72号が発行される頃には第2段階の進学内定者も発表されているはずである。そしていよいよ来年度からは、これまでの進学振分け方式に替わり、進学選択方式によって進学先が決定される。現行の進学振分け方式による学生の進学先選択を振り返って、これから進学選択方式によって進学する学生の参考に供したい。

現行の進学振分け方式で実現された大きな変化は、全科類枠が設けられたことである。全科類枠は、来年度からの進学選択方式においても継続されることになっている。学生の所属する科類にかかわらず、全科類枠を利用するとすべての学部に進学できるようになった。文系学生の中からも医学部、工学部、農学部、薬学部および教養学部の理系学科に進学した者が少なからず現れた。全科類枠で進学した学生に対して進学先の学部・学科からは、「異なるバックグラウンドを持った学生が加わることによってディスカッションが活性化した。」といった好意的な評価が伝えられている。いっぽう、「いつの間にか消えていなくなってしまった。」という声も聞こえてきた。また、進学情報センターの相談室にも、「進学振分けをもう一度やり直したい」、「転学部について知りたい。」という相談も毎年、数例あった。

文系学生が理系の学部・学科に進学し、理系の専門分野を学ぶためには、基礎となる数学や物理など理系科目について、前期課程の早い時期から自覚的に学習して準備をすることが大切である。後期課程の授業内容を理解する力がないと、授業に出るのが困難になり、また卒業研究で途方に暮れるのではないと思われる。進学先の相談に来た学生から、しばしば「就職に有利な学科はどこか。」と質問される。理系の学部という回答を期待しているようだ。しかし、採用は人物本位で行われるのであって、東京大学の学部や学科が採用されるわけではない。4年間の大学生活で、何を学び、何が得られたかということに対して自信を持って説明できない学生は、どこかの企業であっても採用しないと思われる。たとえうまく立ち回って採用されたとしても、就職後の苦労

が目に見えている。教育は段階ごとの積み上げによって行われており、この段階の外にいる文系学生が理系の学部・学科に進学することは異例のことなのである。夢を持って進学先を選択するのは結構なことだが、教育のシステムを侮ってはいけない。

理系の学生が文系学部に進学する場合にも同様なことが言える。文系の学部・学科では、外国についての能力が必要とされるところが少なくない。自分が選択する専門分野で必要な外国語の実力を、進学前にしっかり身につけて欲しい。

相談室で学生の話聞いていて痛感することは、これから先に起きることを予測・想像することが苦手な学生が多いことである。このような学生には、できる限り様々な可能性を提示するようにしている。現在、注目されている花形分野が10年後、20年後も同様に注目されているとは必ずしも考えられない。また、誰であれ、10年後、20年後を確定的に予測することはできない。それにもかかわらず10年後、20年後には、これから進学しようという学生が第一線に立って社会を牽引して行かなくてはいけないのである。そのためには、学生が自分の関心・興味と適性を考えて専門分野を選択し、その分野を発展させるための実力を学生時代にしっかりと身につけることが大切である。それが自分自身の幸せな人生を実現する確実な途であり、さらに社会全体の福祉の実現に貢献する途である。

学生の中には大学を就職するための準備段階、社会に出たときのためのネットワーク形成の場と考えている人が見受けられる。高校までは大学に入るための準備、大学は就職するための準備、それでは就職というのは何のための準備であろうか。それぞれの時期を充実させることが大切である。学生時代にはしっかりと腰を据えて学業に励むべきなのである。人間としての実力、教養と専門的な知識を身につけて欲しい。ほとんどの人間にとって、一人で生きていくことは考えられないので、人間としてのつながり、社会的なネットワークを積極的に築いていくことは大切である。しかし、社会のネットワークの基礎にはギブ アンド テークの原則が据えられているのであって、自分自身を受益者としてしか考えていない実力のない人間は相手にされない。

全科類枠が設定されたことの反射効として、かつては必要な単位を修得すれば入学前に決めた学部に進学できていた成績の下位の学生が進学できないと

いう事態が生じた。この結果、志望先を簡単に断念することができなくて、進学情報センターに相談に来る学生が少なくなかった。このような学生の中には、興味を持った授業や読んでおもしろかった本について話し合っているうちに当初の志望と異なる学問分野を選択し、意欲を回復する人がいた。知的欲求が強く様々な分野に関心を持ち、人生に対し積極的な人のように思われ、困難にであっても発想を変えて切り抜けることができるたくましい人だと感心させられた。

進学振分け制度は複雑で、精通するのは容易ではない。平成29年度からの進学選択方式は、現行の進学振分け方式からの大きな変更はないものの、さらに複雑になる可能性がある。進学選択の仕組みについては、入学時に配布される「履修の手引き」と進学先志望登録の直前に配布される「進学選択の手引き」に詳細に説明される。仕組みが複雑なため、かなりページ数の多い冊子である。読んで理解するのは必ずしも容易ではない。しかし、これら2つの冊子に書かれていることは、進学選択について基本的な情報なので必ず熟読して欲しい。ここで基本的な情報というのは、これら冊子の記述と異なった情報は間違いだということである。進学選択についてはサークルなどの先輩から話を聞くことが多いのではないと思う。経験者から個人的な体験を聞くことは、これはこれで有益である。しかし、注意しなければならないのは、聞いた情報の中には間違いがあることである。相談に来た学生の話聞いて、「進学振分けの手引き」をどうしたらこのように解釈ができるのかと驚かされることがある。肝に銘じて欲しいことは、新しく実施される進学選択方式の経験者はいないということである。先輩から聞いたことは変更されている可能性が大きい。また、インターネットで流布している情報にも間違いがある。インターネットの情報のかかなりの部分は匿名の情報である。適切な情報か否か慎重に吟味する必要がある。要は、進学選択については「履修の手引き」と「進学選択の手引き」をよく読むことである。

次に大切なことは、情報を何時取得すべきかである。つまり、「履修の手引き」、「進学選択の手引き」を何時読むかということである。情報の取得は早いほどよい。「先んずれば人を制す」なのである。これらの冊子が配布されたならば、すぐに読むことである。読んで理解できないことがあったら、進学

情報センターや教務課に問い合わせるとよい。「履修の手引き」を早く読んでよく理解すると、適切な履修計画を立てることができる。「進学選択の手引き」は配布されてすぐに進学先の登録が開始されるので、すぐ読むことは当然のことである。

進学先志望登録や登録先変更時期には、自分の成績平均点で志望先に内定するか否かを判断しなければならない。進学振分け会議の資料を見ていると、何も考えずに志望先として単に自分の志望を登録しているだけの人が少なからず目につく。正しい情報に基づいて、よく考えて登録することである。どんな情報に基づいて志望登録の判断するのかといえば、進学情報センターの情報である。進学情報センターのPCを使って、進学選択単位ごとの志望者の成績平均点の分布表とともに、第一段階、第二段階の志望先、内定者の内定段階（第一段階、第二段階第一志望、第二志望、第三志望、再志望）ごとの人数、志望者数など過去10年ほどのデータを閲覧できる。志望者数や内定者最低点の数年間の変動を考慮すると、自分が内定するかどうかの予測は多くの場合かなり簡単にできる。注意しなければいけないのは、第二段階以降の志望登録である。この場合は、できるだけ自分の志望する学部・学科に内定するように慎重に志望登録をする必要がある。第二志望の登録先として、第一志望で定数が満たされてしまう進学選択単位を登録すると、この場合には第二志望の手続きが行われないので、登録しなかったのと同じ結果になってしまう。登録の前に志望登録者数や内定者の予想最低点などを確認し、志望する学部・学科のどこにも内定しないということのないようにしなければならない。

進学先の選択について、両親や友人などの意見を聞いてみることは有益である。しかし、最後は自分で決定すべきである。繰り返しになるが、そのときには必ず進学情報センターを訪ね、正しい情報を確認すべきである。